

校長による今月のおすすめ本

『遠野物語』 柳田 国男



今月は8月。お盆があるからでしょうか。夏のこの時期はテレビで怪談や心霊現象を扱ったものがよく放映されます。また、書物でも怪談ものは冬よりも夏の方がよく出るはず。少しでもひんやりしたいという気持ちの表れでしょうか。

そこで、今回紹介する本は、『遠野物語』です。民俗学者である柳田国男が著した、日本民俗学の分野で最も一般の人々に親しまれている書物といっても良いでしょう。岩手県遠野地方の民間伝承を記録したのですが、多くの読者は、民俗学を意識するよりも、そこで語られている天狗や河童、山姥、座敷童、また、幽霊などの伝説や怪異譚、もっとはっきり言うと、その怪談の面に興味を引かれて読むのでしょうか。

せつかくですから、その中の一つを紹介したいと思います。

佐々木氏の曾祖母年よりて死去せし時、棺に取り納め親族の者集まり来てその夜は一同座敷にて寝たり。死者の娘にて乱心のため離縁せられたる婦人もまたその中にありき。喪の間は火の気を絶やすことを忌むが所の風なれば、祖母と母との二人のみは、大なる囲炉裏の両側に坐り、母人は旁に炭籠を置き、をりをり炭を継ぎてありしに、ふと裏口の方より足音して来る者あるを見れば、亡くなりし老女なり。平生腰かがみて衣物の裾の引きずるを、三角に取り上げて前に縫ひつけてありしが、まざまざとその通りにて、縞目にも見覚えあり。あなやと思ふ間もなく、二人の女の坐れる炉の脇を通り行くとして、裾にて炭取りにさはりしに、丸き炭取りなればくるくるとまはりたり。母人は気丈の人なれば振り返りあとを見送りたいれば、親縁の人々の打ち臥したる座敷の方へ近より行くと思ふほどに、かの狂女のけたたましき声にて、おばあさんが来たと呼びたり。その余の人々はこの声に睡を覚しただ打ち驚くばかりなりしといへり。

いかがですか。亡くなったおばあさんが現れた際、着ていた着物が普段と同じように前を縫い付けてあったり、また、その裾が触れて丸い炭取りがくるくると回ったりする場面の描写など、何気ない描写ですが現実味があって、かえってぞっとしますね。

実は、近代を代表する作家の一人である三島由紀夫が、『遠野物語』のこの話を絶賛しました。そのことにより、上に紹介した話は、『遠野物語』の中でも最も有名なものとなっています。

怖い話が好きな人は、ぜひこの夏に『遠野物語』を読んでみることをお勧めします。もちろん、真夜中、トイレに行けなくなっても私の責任にしないで下さいね。

(校長 矢持昌也)